



「下村満子の生き方塾」ニュース

【号外】2019.10

—2019年8月合宿速報版①—



第一原発の廃炉作業を見学し、ホッと一息をついている合宿参加者

空しさばかりが募る、廃炉の現場

●4000人が働く第一原発

下村満子の生き方塾」夏合宿は2日目の8月24日、大熊町の中間貯蔵施設を視察した後、富岡町の東電廃炉資料館を訪ねました。第一原発で行っている、廃炉作業を事前に勉強し、視察をより有効にするためです。さらにもう一つの理由は、第一原発構内に行くには、放射線や保安上の理由から、一般車両では行けないからです。

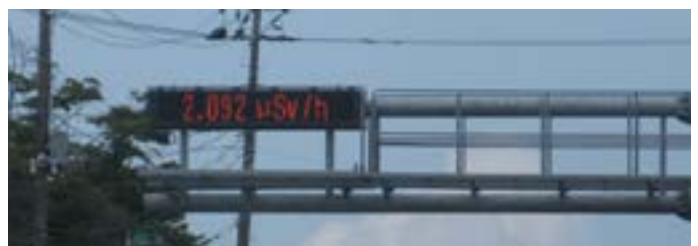
資料館で原発事故のあらましと、各発電ユニットは現在どうなっているのかの説明を受けた後、東電バスに乗り換えて第一原発に向かいました。入退域管理棟での厳重な身分確認を経てから、大型休憩所で作業員らと一緒に1食380円の昼食を取りました。定食は麺を含む4種類があり、肉体労働が多い現場を考慮して、ハイカロリーの食事です。この休憩所からは、窓を通して爆発で骨組みが露わになった原子炉建屋や、汚染水を溜めている大型タンクを眺めることができました。毎日4000人もの人たちが廃炉作業に関わっています。

入退域管理棟に戻り、個人線量計を付けてから構内専用バスで、汚染水からトリチウム以外の放射性物質を取り除く多

— 第一原発事故現場を視察



事故現場視察の前に、廃炉資料館で説明を受ける



原発に向かう国道6号には、1時間当たりの空間放射線量が表示されている



作業員らと一緒に、380円の定食で昼食



原発構内は、専用バスに乗って見学する



立ち並ぶ約960基の巨大タンク。110万トン超の汚染水を保管し、さらに2020年末までに137万トン分のタンクを確保する計画だが、22年にはタンクの容量が限界に達する

核種除去設備、汚染水の発生源である地下水を汲み上げるサブドレイン設備、爆発事故を起こした1、3、4号機や、爆発こそしなかったものの、大量の放射性物質を大気中に巻き散らかした2号機の外観を車窓見学しました。構内の大部分は、後片付けや土が見える所はすべてアスファルトで覆っているから線量は低いのですが、原子炉建屋周辺は高線量のため、バスから降りての見学はできないからです。また、エイブル社が取り組んでいる1、2号機共用排気筒切断現場なども見学しました。午後1時に構内に入り、身体スクリーニングや線量チェックを経て、退出したのは3時半。この間の被ばく線量は0.01ミリシーベルト。

「ヴィレッジ」に帰るバスが待機している廃炉資料館にいったん戻り、東電の事故の反省や廃炉の取り組みを紹介した映像を見た後、工夫を凝らしたパネルや模型を見ながら職員から説明を受けました。

第一原発視察、廃炉資料館見学の感想については、原自連（原



水素爆発で建屋の上半分が吹き飛んだ4号機



エイブルが切断に取り組んでいる、1、2号機の排気筒

発ゼロ・自然エネルギー推進連盟)会長の吉原毅さんが、同連の幹事会メンバー全員に報告したので、前号のように、それを掲載します。

—その後(中間貯蔵施設見学の後)、福島第一原発に向かい、厳重な手続きを経て、バスで構内を視察しました。緊張の中を、崩壊して補修された各原発、エイブル社の開発した画期的なロボットによる解体作業中の排気塔、膨大なタンクなどをバスから見て回りました。その後、廃炉センターで説明を受けましたが、贅沢な施設で、映像を駆使した設備など、反省という言葉の裏に違和感を覚えました。

今回の視察には、元東京電力の副社長、石崎芳行氏の尽力があるのですが、石崎氏をはじめ、中間貯蔵工事情報センターの方々、廃炉資料館の方々、皆さん親切で人柄も良い方々ばかりですが、そのお話の中に、東電よりの意図的な情報操作的な内容が隠されており、一種のマインドコントロールを目的とした、プロパガンダ施設であると思います。これに小



廃炉資料館で、パネルや模型を見る

学生や、中学生、高校生、大学生、一般人などを誘致し、反省の姿勢を見せながら、心を許させ、「2度とこうした事故は起こさないから原発を稼働させてほしい」ということを納得させてしまおうということが、これらの施設の本質です。

本当に卑怯な、嫌なやり方です。現場は頑張っている、現場はいい人だ、こういうところで、つい人間は妥協して信じてしまうもの。こうしたテクニックを上層部やマーケティング担当、外部の電通などの専門家が画策して、上層部の意図を通そうとしているのです。

小泉先生が、昭和20年夏の敗戦で語っているように、上層部が無責任に無謀な誤った方針、決断を出すと、現場がいくら崇高であり、自己を犠牲にして神風特別攻撃をかけても戦局は打開できず、おびたしい犠牲者がでるのです。これと同じであり、私は許せません。そうしたことを夜の講義でお話し、若い塾生の方々にお伝えしました—



廃炉資料館は、元は第二原発のPR館だった

先が見えない汚染水 海洋への放出も

溜まり続け、未だに道筋が見えない汚染水対策についての質問に対して、廃炉資料館の担当者は「それは国の原子力安全委員会が検討していることなので何ともいえない。個人的に言えばトリチウムはどの国の原発でも希釈してから海に放出している。科学的には問題ないのですが、微妙な事情が錯

綜しているのです。難しい問題」と言葉を濁しながらも、いずれは海洋放出もやむなしという考えを滲ませました。タンクは3年後に満杯になるのですから。

東電の担当者に「廃炉のためにいろいろな技術を開発し、世界初というのも少なくないと聞いている。しかし、創造するための技術ではなく、後始末というネガティブな技術であり、空しい思いがする。現場ではどんなふう感じているか」



合宿を下支えしてくれたエイブルの中馬真理子さん



メーンの原発視察を終えて、挨拶する下村塾長

との質問に対しては、「廃炉を安全かつ円滑に進めるための手法が開発されているわけで、意義は大きいと思う。こうした遠隔操作の技術やロボットの開発は、これからの時代には役立つと思う」と、答えました。でも、前にも述べたように、「壮大な無駄」の思いは拭いきれませんでした。

2日目の夜は、常松景子さんの司会で、塾生の感想発表と吉原毅さん、濱田総一郎副塾長の講義がありました。初めてテレビ朝日の報道ステーションが放送した、エイブル社が行っている高さ120mの排気筒の切断作業の様子を報道したDVDを上映しました。1号機の爆発で排気筒はひびが入り、大風が吹くと破片が吹き飛んでしまう恐れがあるため、高さを半分に切断する必要があります。排気筒はベントや爆発で放射線量が極めて高く、一瞬たりとも期を抜けない作業の連続です。廃炉はこのように、決して容易な仕事ではないのです。

感想発表は各班の班長や、班長が指名した塾生が行い、主な感想は以下の通りです。

山本亮二郎さん 原発事故によって着の身着のまま避難した街並みを見て、衝撃を受けました。オリンピックのおもてなしもいいが、世界の人々に来てもらい、事故の現場、容易でない歩みを見て欲しいと思います。

篠原陽子さん 朝、ここ（Jヴィレッジ）の7階から外を見ると、美しい景色が広がっており感動しました。しかし、今日は、除染した場所と、そうでない場所を目の当たりにして、そのギャップに驚きました。原発構内に入ると、子どもたちが描いた絵をポスターに写したエイブル社のバスがありました。子どもたちの「ふるさとを戻れる場所にしてほしい」という願いをしみじみ感じました。

エイブル佐藤社長 あの絵は、社員の子供たちが、「お父さん、頑張って。体を大切にしてください」という祈りを込めて描いたものです。

2人が感想を述べた後、佐藤社長の音頭で乾杯しました。その中で佐藤さんは、現在手掛けているバイオ発電について「原発の仕事は、発注元の東電から元請の東芝、日立、一次下請けの東芝や日立の子会社、そのから6次下請けまでとカーブ制度が敷かれています。エイブル社も下請け企業の1つです。事故の後始末作業の際、40人もの社員は100mシン



乾杯の音頭を取る佐藤社長

ベルトの放射線を浴びたため、原発で働くことはできなくなりました。元請や元請子会社に相談しても、埒が開きません。それでは新たな職場を開発しなければ、と模索し、ようやく、米国で大量に発生する廃材を熱源とするバイオマス発電に辿りつく



排気筒切断の様子を放送した、TV朝日の報道ステーション

ことができました。この間の歩みは、既得権益を守る人たちから様々な妨害や嫌がらせに遭いました。でも、このお蔭で、各種のロボット開発、廃炉のノウハウを磨くことができ、カーブ制度の地位を上げることができました」と、下請けの苦勞を披露しました。

乾杯の後、再び塾生の感想披露が再開しました。

坂本祐一さん 文芸春秋の9月号には、元東電社員で炉心専門家の、「炉心溶解、メルトダウン原発事故は、津波襲来の前に、地震直後から始まっていた」という告発記事を読んでショックを受けました。問題解決にタブーは禁物なのに、東電はタブーに満ち溢れています。原発事故に東電の本質を見ました。

白鳥則生さん 現場を見て、問題の深刻さを認識しました。原発のように、人類は新しい技術を開発するのが宿命ですが、誤りを犯した場合、それを止める勇気があるかどうか問われています。世界で唯一原爆被爆を体験した日本なのに、核兵器使用禁止条約を批准していません。間違ったらそれを改める決断の重要性を学びました。

山田晃嗣さん 立ち入り禁止地区を見て、本当に考えさせられました。現場での頑張りがあって廃炉や除染作業が行われているのに、肝心のリーダーはどうなのか。リーダーこそ正しい考えをして欲しいと感じました。

三浦由紀子さん 原発に入った時、8年前の3.11を思い出しました。夫も公務員だったので、支援物資を山木屋に避難していた浪江の人々に渡しました。山木屋は線量が低いという、国、県の判断で避難したのですが、実は全くの嘘。高線量地域でした。先日、フレコンバッグに入れられ、家の庭に埋められていた汚染土が運び出されましたが、中間貯蔵施設では、そうしたフレコンバッグが山積みされています。原発事故の怖さを知らされ、リーダーたちの想像力欠如もよく分かりました。原発は要りません。自然エネルギーこそが必要です。

渡辺薫人さん 3.11は東大の合格発表の日でした。それだけに感動と驚きが同居していた感覚です。現場を見て、原

発の怖さを初めて知りました。こうした事実を知らない若い人が多い。事実を自分の目で確かめ、行動すれば、世界は変えられると思います。

大野一彦さん 映像で事前に原発事故の様子を見て、それから現場を訪れる。この二重の取り組みで、事実に近いことができます。今、大学で学ぶ学生は、事故当時、中学生であり、事故についてはよく分かっていないと思います。若い人にこそ、現地に行って事実を知ってほしいと思うのです。

田村楓さん 3.11 当時、高校生でした。でも住んでいた場所は、東日本から遠く離れていたもので、無関心でした。そんな自分ですが、事故の実態を知った以上は、知らぬふりできません。エネルギー問題を自分のこととして考えていきます。

諸富英輔さん 原発構内では撮影禁止だったので、すさ

まじい光景は目に焼き付けました。今回の視察で二つのことを学びました。一つは、「原発は安全」と言い続けてきたメディアのインチキさで、もう一つは事故直後、放ってればさらなる放射能汚染が発生すると危惧されていた時、「自分がやらなくちゃ」と原子炉に入っていた人たちは、何ら表彰されていないことです。原発所長や幹部たちの頑張りは一定程度評価されているのに、最前線の人たちは話題にも上っていません。考えさせられます。

山下徹さん 3.11 は中学校の卒業式でした。その時、多少は放射能の怖さを知りましたが、今日見た 8 年後の姿は、とても衝撃的でした。自然がもたらす地震と津波だけの被害だったら復興も進むのに、人が作った原発が事故を起こしたために、復興が進まない。原爆、原発という原子力そのものに、真剣に向き合わなければならぬ日本人の宿命を知りました。

日本の原子力行政に自主性はない

吉原さん講演

塾生の感想発表の後、吉原さんが次のように講演しました。

①事故直後、原子炉が吹き飛びそうな事態に直面した時、第一原発の吉田所長は「誰が行くのか」と居合わせた作業員や職員に問い掛けました。すると、数人が手を挙げ「決死隊」を志願しました。これはこれで美談なのですが、問題はこういう切羽詰まった状況を誰が作ったのかということです。無数のパイプが通う原発は地震に弱い、日本は地震に弱いと分かっているながらも、原発を推進したリーダーたちは何の責任も取らない無責任者ばかりです。いったん始めると、失敗は目に見えているのに、止められないリーダーたち。そして、こうした無責任リーダーを放っておく日本国民のだらしなさ。問題は深刻です。

②太平洋戦争が始まる 4 か月前の 1941 年 8 月、政府のトップ、軍の指導部は、アメリカと戦ったら敗北することを知りました。それにもかかわらず、12 月には開戦し、3 年 8 か月後に日本は敗れました。戦争は 1931 年の満州事変から続き、37 年からは、泥沼の日中戦争にはまりました。始まっている戦争だから、負けると分かっているにもかかわらず止められなかったのです。部下たち、若い人たちに特攻を煽った指導者のうち、何人が責任を取ったのでしょうか。原発も全く同じです。危険だと分かっているにもかかわらず、放射能ごみは捨てる場所がないと分かっているにもかかわらず、止めないのです。

③先程坂本さんがお話ししたように、文芸春秋 9 月号には、炉心の専門家が書いた第一原発のメルトダウンに関する記事が掲載されています。それによると、地震が発生した直後には、圧力容器内にあるジェットポンプにつながるパイプが切断し、そこから冷却水が漏れ続けて、メルトダウンが始まったのです。原発技術を開発したアメリカは、大地震がない国ですから、耐震という観点での設計は重要視されていません。アメリカは、地震よりトルネードが怖い。だから原発の要点である非常用発電設備は地下にあるのです。第一原発 1 号機は、

100% GE 製ですから、地震津波を考慮していません。だから、津波をもろに受ける地下に設備を設置したのです。津波の海水を浴びて、発電設備は壊れ、冷却不可能、メルトダウンに至ったのです。

④原発が地震に弱いのは、パイプが多いからです。パ



真のリーダーが必要、と吉原さん

イプは継ぎ目が弱いし、建屋を通す時は、壁に穴を開けなくてはなりません。だから揺れに弱いのです。第一原発は 900 ガルの揺れに耐えられると説明していたが、10 分の 1 の揺れで配管が壊れました。地震大国の日本に、原発は合致しないシステムです。こうした事情を知っているから、世界の保険会社は、日本の原発の保険を引き受けていません。だから、今の原発事故後、始末のお金は、国民の税金に頼っているのです。

⑤廃炉、汚染水対策、核のごみ保管。これらはすべてお金がかかるもので、いつまで続くか分かりませんから、原発は採算が取れません。そして次世代に、ごみを押し付けているわけですから、これほど罪深い話はありません。経産省は、こうした費用を無視して、原発のコストは安いと嘘をついて再稼働を進めています。

⑥1^{キロワット}の太陽光発電コストは、世界では 2 円を切っています。原発推進派は、太陽光や風力は天気によって安定しないと水を差しますが、今はバッテリー技術が大きく進化していますから、電気は蓄えることができます。地消地産で

すから、送電コストは掛かりません。太陽光、風力、水力はただですから、自然エネのコストは安い。太陽光の場合、耕作放棄地、遊休地を使いますから、発電で得たお金で、地元振興にも使えます。一石二鳥、一石三鳥のメリットがあります。

⑦それなのになぜ、原発を止められないのか。それは、日本は、日米原子力協定によって縛られ、日本は、自主的に止めることができないのです。アメリカは、アメリカ人の国ではなく、多国籍企業が支配する国です。イギリス、フランスは、金融資本の大本ロスチャイルド家に支配されています。ウランは、ダイヤモンドと同じように、ロスチャイルド家が供給流通を支配し、アメリカの多国籍企業もロスチャイルド家の

影響を受けています。日本の原発は、ウランシジケートの傘下であり、それに逆らうと、現行の日本のエネルギー政策は立ちいかなくなります。原発建設、稼働による既得権益を失うことをリーダーたちは恐れています。

⑧こうした中で、日本はお上に逆らわない風土になりました。リーダーは、今だけ、カネだけ、自分だけを信条にしています。額に汗して働く人が報われないのは、ろくなリーダーがいらないからです。真のリーダー不在を直さない限り、日本のアメリカ従属社会は変わりません。今こそ小泉さんのように、間違いに気づいたら直ちに直す、主張すべきは主張する、という勇気を持つべきなのです。

自然エネルギーこそが、温暖化防げる

濱田さん講演

吉原さんに続いて登場したのは、濱田副塾長です。濱田さんの発言要旨は以下の通りです。

①国連気候変動に関する政府間パネル (IPCC) 5次評価報告書 (2014) は、このままでは、2100年の平均気温は、温室効果ガス排出量が最も多い、最悪のシナリオの場合には、最大4.8℃上昇すると発表しました。グリーンランドの氷は急速に解け、このままのスピードで温暖化が進めば、あと20年で南極の氷はなくなるとも言われています。

②温暖化に伴う海水温の上昇による熱膨張と、氷河などの融解によって、2100年までに、最大82cm海面は上昇すると予測され、ひょっとしたら私たちが生きている間に、東京は水没するかもしれません。

③温暖化は、海面上昇だけでなく、大気中の水蒸気量増加を招いています。この結果、大雨が降ったり、洪水を引き起こしています。これらの原因は、全て人間が作り出しました。欲望にまかせて、地球の有限資源を食い散らかした結果なのです。天変地異は、忘れた頃やって来ます。100年に一度が、50年に一度になり、20年に一度にと、異常気象は日常になっ

てきます。

④G7では、温暖化対策について何の決定もできませんでした。世界を動かすリーダーたちが集まっても、何もできないというのは、「真のリーダー」がいらないからです。今必要なことは、美辞麗句ではなく、具体的な温暖化対策です。それに最もふさわしいのは、自然エネルギーです。

⑤「足るを知る」をベースにした日本人の心を発信でき



今こそ「足るを知る」を、と濱田さん

るのは、日本人しかいません。今日、廃炉作業に体を張って頑張っている、エイブル社の佐藤社長の姿に心を打たれ、学んだものは大きかった。この感動を分かち合うことができるのは、「生き方塾」だけです。物質的欲求を抑えて、道徳的な心を高める。こうした進化を基に、人類共通の善の世界を実現したいものです。

●エイブル社の好意に感謝

吉原、濱田両氏の話が終った後、打ち上げの大懇親会となりました。飲み物は全てエイブル社の好意に甘えて、大皿料理を堪能しながら、懇親を深めました。さらに会場を移して、カラオケパーティーに入りました。会場づくり、カラオケ操作、終了後の後片づけは全て、「あつまる」の塾生にお願いし、パーティーは夜遅くまで盛り上がりました。



かつてない盛り上がりとなった懇親会



懇親・カラオケ大会は「ふるさと」の合唱で締めくくる



カラオケ会場作り、片付けは「あつまる」が尽力

原子カムラの仕打ちを体験

佐藤社長講義



仕事への思いを語る、佐藤さん

●防波堤建設ケチり、事故招く

合宿最終日の25日は、橋本光雄さんが司会を担当しました。午前6時から、早朝坐禅。前夜の大盛況にもかかわらず、全員で2柱、坐りました。洋食の朝食の後、佐藤社長が、自社の取り組みや仕事への思いを、熱っぽく語りました。佐藤さんの講演概要は以下の通りです。

①原発事故と収束作業、一歩進んで廃炉作業の中で、トップの役割が問われています。既得権益の塊りである原発を背後から支配しているのは、日本国であり、米国です。原発は、ドイツに先駆けて原爆を造る1939年のマンハッタン計画から派生した技術です。アメリカは、自国だけ原爆を保有できれば全世界を支配できると考えました。しかし、危機感を持った科学者が、イギリスに情報をもらしたことから、アメリカ一国の原爆保有は不可能になりました。ウランは米国の企業が一貫して支配しており、日本の原発は、アメリカの意向を無視してはやっていけないし、止めることもできません。

②原爆は、核分裂エネルギーを一挙に利用することに対して、原発は、核分裂エネルギーを制御しながら使おうというもの。制御したり、核燃料を冷却するのに必要なものが水です。核燃料は、崩壊熱という巨大な熱エネルギーを出すからです。その水を失ったのが、原発事故です。国は嫌がっていましたが、その意味で、海水注入は正しい措置判断でした。

③東芝が大赤字となったのは、それまでしがみついていたGE社の沸騰水型原子炉BWRより、ウエスティング社の加

圧水型原子炉(PWR)の方が安全だと考え、ウエスティング社と三菱の契約を止めさせ、高値で東芝と契約させたからです。その時の東芝の担当者は、やがて社長になりました。しかし、日本ではもはや、原発建設の動きはなく、原発輸出もできていません。こうして赤字転落となったのです。

④第一原発の爆発は、水素爆発です。崩壊熱で燃料管が壊れると、水素ガスが発生し、1、3号機は水素爆発しました。4号機も3号機の爆発のあおりで爆発しました。2号機、1号機爆発で、建屋に隙間ができて、そこから水素ガスが漏れ、辛うじて爆発は免れました。しかし、隙間から大量の放射性物質が環境に放出しました。

⑤1、2、4号機は、燃料取出しが手つかずですが、3号機は取り出しが始まっています。4号機は、建屋がかなり傷んでいるから、東電は危機感を持っています。

⑥15mの防波堤を作っていたら、事故は避けられました。貞観11(869)年5月26日に、三陸沖を震源とし、大規模な津波を伴った巨大地震が発生しました。この時の大津波を教訓にしていれば、と思うのです。貞観に則した防波堤建設を意見した社員もいたのですが、経営トップは、自分が会長の時はあり得ない、防波堤を建設すれば経費がかさむ、などの理由で、建設を見送りました。この結果が事故です。

●カースト制度破りに挑戦

⑦エイブルを創業したのは1992年、36歳の時でした。実は、東電に就職しようとしたのですが、試験に落ちて、子会社の東電工業に入りました。しかし、子会社では飽き足らず、エイブルを起業したのです。原発のトラブルを未然に防ぐコンサル業務を目指し、24時間対応の態勢を取りました。さらに電力会社→元請→子会社→下請け→孫請け→曾孫請けという、縦割りの「カースト制度」の中で、情報と技術の水平展開を図れば、無駄な被曝は減るはずだと考えました。

⑧起業してしばらくは、原子カムラの冷たい仕打ちに遭いました。原発の専門家集団は、東大、京大、東工大、東北大などの、原子力工学科出身者で固められており、閉鎖社会です。だから、原子力村というんですが。エイブルの様な中小企業は人材を集められませんでした。

⑨創業から2011年までの20年で、エイブルは、コーストの地位を少しずつ上げました。東電は、双葉町で、7、8号機の増設を内定していたので、エイブルも20人の新たな雇用を決めていました。その時、3.11が起きました。電源確保のケーブル敷設、汚染水汲み上げ、ロボットによる瓦礫片付けなど、あらゆる収束作業に携わりました。吉田所長から、何度も労いの言葉をもらいました。

⑩今、エイブルが力を入れているのは、高線量下でも作業

できるロボット開発と、再生可能なエネルギーであるバイオマス発電です。発電は、廃炉作業の人材育成と、被曝した従業員の職場確保を意図しています。いわき市の好間工業団地で、11万2000^{キロワット}を発電する計画で、2021年に運転開始を予定しています。

⑪このほか、大熊町で、太陽光を基にした水素発電とスマートシティ構想への参画、浪江では波力発電といった、再生可能エネルギー、地産地消エネルギー開発を目指しています。

あの日を思い出しながら「祈りの集い」の地巡る

佐藤社長の講義が終了し、合宿の締めくくりとして、「生き方塾」が2012年3月から毎年3月、5回行った鎮魂のための「福島を忘れない! 祈りの集い」会場を視察しました。3会場のうち、訪れたのは、約2千人が参加した第1回会場となった薄磯海岸でした。ここでは200人が犠牲となりました。第一回のあの日は、強風が吹き荒れる荒天でした。海を見なが

ら全員で当時を振り返りました。

例年ですと最終日は、お昼前に解散ですが、今回は塾長の発案で、四倉町の「ワンダーファーム」で昼食バイキングを味わってからの解散となりました。食事代の半額以上を塾長が負担しました。ごちそうになりました!



第1回「祈りの集い」を開いた薄磯海岸。ここではおよそ200人の住民が、津波で亡くなった



大盛況のカラオケ大会

